

関東地方における当為表現

——史的变化・分布からの一考察——

湯浅彩央

はじめに

本稿は、言語資料で得られた中央語の歴史と、「方言文法全国地図」に示された各地方の文法事象を対照させ、日本語の歴史を探ろうとするものである。

数多い文法事象の中でも当為表現（ネバナラヌ・ナケレバナライ・ナクテハイケナイ）は先行研究が少なく、その上、田中（一九六七・一九六九）、諸星（一九八五）、渋谷（一九八八）等の史的变化を考察したものに傾く¹⁾。また、方言についてはさらに少なく、寺川（一九八四）の尾張方言を考察したのみである。このように、従来の研究では史的变化はかなり明らかになつたものの、共時的様相が十分に論究されていない。したがって、方言地図にあらわれる各地域の地理的状况を整理し、言語資料で得られた歴史と照合し、歴史と分布から検証する必要がある。

そこで本稿では、江戸語・東京語資料における当為表現形式を

関東地方における当為表現

整理し（史的变化）、その結果を方言地図と対照させ、通時態と共時態から考察を試みることにする。調査資料は注の後に示した。調査対象は江戸およびその周辺の言語話者に限り、上方者・田舎人の発話例を除外した。また「ト書き・序・跋・大意」等にあられるものも除外する。

方言地図は大橋勝男氏調査「関東地方方言事象文法図」（以下、大橋地図²⁾）および「方言文法全国地図」第5巻（国立国語研究所編、以下GAJ）を用いる³⁾。なお、「方言資料叢刊」第5巻「日本語方言の否定の表現」に当為表現の調査項目があり、この結果は大橋調査の約二〇年後の言語状況と位置づけられ、変化を検討するのに適しており、参考とした。

考察の手順は、当為表現が「ネバ・ナラヌ」「ナケレバ・ナライ」のように前項部は否定の助動詞の条件表現、後項部は禁止表現と二表現が合成された形式であるため、分けて考える必要がある。そのため、前項部と後項部に分け、はじめに言語資料の史的变化を整理し、方言地図と対照を行うこととする。

一 前項部の様相（ナケレバ・ナクテハを中心とした）

一・一 江戸語・東京語資料の調査結果

洒落本・滑稽本・人情本・明治期文学作品・洋学資料における当為表現の表現形式・用例数を表1〜3にまとめた。また、表4・5は否定の助動詞の条件表現形式に占める当為表現前項部の使用数を記した。形式別に作品中の全出現数を示し、併記した括弧の数が当為表現の用例数をあらわす。なお、全体数から当為表現の用例数を差し引いた数が条件表現の用例数となる。

まず、洒落本から見ると、ズバ・ネバ・ナイケレバ（ネヘケレバ）・ナイデハ（ネヘデハ）の使用が確認される。この中でもネバ・ナイケレバが集中して用いられている。また、洒落本ではナイケレバのみ見られ、ナケレバはまだあらわれていない。したがって、洒落本が出版された十八世紀後半の江戸語では、否定の助動詞ナイの主たる条件表現形式はナイケレバであると推定される（数字は頁数）。

始終はどこぞへ、かたづかずはなるめへ【吉原談話】（203）

どうにもかへらにやならぬ【傾城買四十八手】（405）

なんでもこんなや中にとゞけねへければなりやせん

【品川楊枝】（298）

おいらもほんに此間太刀からへ遣つた物を出さねへじやアならねえ

【五大力】（174）

そして滑稽本も洒落本と同様にズバ（ザア）・ネバ・ナイケレバ・ナイデハが見られる。

そんなことにでもせざアなるめへ

【浮世風呂】（202）

信心せねばならぬものだ

【浮世風呂】（242）

地主さまへ往て来ねへきやアならねへ

【浮世床】（301）

そこを女房も得心して居ねへちやアならねへ【風呂】（191）

さらに、下つて人情本ではこれらの形式に加え、新たにナケレバ・ナクテハが使用されるようになる。

イヤ今日はおそくなつたから今日はよしねへ。余程いそがな

ければならねへ【春色梅児誉美】四

ナニそりやい、がの、帰らなくツちやアならねへことが出来

たからヨ

【春色辰巳園】（313）

続く東京語前期（明治元年〜二〇年）資料もほぼ人情本の使用

状況と重なる。ただ、ナイケレバはナケレバへと変化し終えたの

だろうか、認められない。

廣めもせず置て往て仕舞なければ成らないから

【春雨】（363）

石に嚙付ても出世をしなくツちやアならないと心懸なければ

ならない所だ

【浮雲】（79）

中期（明治二二年〜四〇年）ではネバ・ナケレバ・ナクテハ・

ナイトの四形式になり、ズバ・ナイデハが消滅する（ナイトは後

項部イカン・イケナイのみに接続する）。

急に行かなければならん所ちやあるまい

【金色夜叉】（141）

君、しつかり傘を握つて居なくツちやいけなせい

<表1：江戸語 当為表現>

後項部	ナラス (ナラン)			ナラナイ (ナラネヘ)			ナルマイ			イカナイ・イケナイ				
	ネハ	ニヤ	ケレバ ナイ テハ	ナケ レハ	ナイ ケレバ テハ	ナイ テハ	ネハ	ニヤ	ズハ	ナイ テハ	ネハ	ニヤ	ズハ	ナイ ケレバ テハ
維兵物語 (1683)														
甲駅新話 (1775)			1											
古契三娘 (1787)														
通言総籙 (〇)														
傾城買四十八手 (1790)		3												
傾城買二筋道 (1798)			1											
品川楊枝 (〇)			3											
狂言雑話五大力 (1802)			1			2	1	1					1	
滑稽吉原談話 (〇)	1				2								1	
小計	1	3	5		4	3	1	1					1	
浮世風呂 (1809~10)	4	1	1	1		1	2	1						
浮世床 (1812)	2		2									1		
潮来婦誌 (1816)	2				2									
小計	8	1	3	1	4	1	3	1				1		1
春色艶記馨美 (1832~34)	1	2						1				2		
春色辰巳園 (1834~36)	1	1			1	5	5	2	1	2	1	1	1	
春告鳥 (1836)	1			1		8	1					2		1
小計	3	3		1		14	6	2	4	4	3	1		1

*点線左の数字が地の文、右の数字が会話文における用例数を示した。

*東京京語資料の<>は手紙、| |は演説部をあらわす。なお、小計は手紙・演説の例を除いた計数を示した。

<表2：東京語 当為表現>

後 前	項 部	ナラス (ナラソ)			ナラナイ (ナラネヘ)			ナルマイ			イカン			イケナイ			ダメ
		ネ バ	ニ ヤ	ナ レ バ	ナ ク テ ハ	ズ バ	ネ バ	ナ レ バ	ナ ク テ ハ	ズ バ	ネ バ	ナ レ バ	ナ ク テ ハ	ナイ ト	ナ レ バ	ナ ク テ ハ	
前	西洋通中膝栗毛(1869)			1		1	3			2							
	安愚楽編(1871)	1	1	2					1								
	胡瓜遣(1872)								1								
	春雨文庫(1876)	1	6	1	1	2	5	2	2	2					1		
期	雪中梅(1886)	15								1	7	1					
	浮雲(1887)	4	7	6	3	4	2	4	1			1					
	小計	5:22	1:7	10	3	7	7	7	2	5	7	1	1		1		
中	舞姫(1890)																
	文づかひ(1891)																
	家目伝(1895)					2							1				
	たけくらべ(々)																
	金色夜叉(1897)		1	25		4					1		2	3			
	半日(1901)	2		1			1			2	2	1					
	重右衛門の殿後(1902)	1		4		1	1							1			
	琴のそら音(1905)	3		2	1									1	3		
	坊ちゃん(1906)			3	3	2	2	9	4				1			1	2
	二百十日(々)			1				1	2							1	4
期	蒲団(1907)	2		8	5	1					1		2	1			
	野分(々)	20	2	3	1	6	1	3	1	5		1				6	1
	小計	28	2	1:21	36	2	9	2	2	11	12	5	7	3	1	3	1
	或る朝(1908)										1	3					
後	清兵衛と飄軍(1913)																
	道草(1915)									83	6	6				1	2
	城の崎にて(1920)			1													
小計			1						84	6	6				1	2	

<表3：洋学資料 当為表現>

後項部分 前項部分	ナラス			ナラナイ		ナルマイ	イケナイ
	ナイデハ	ナケレバ	ナクテハ	ナケレバ	ナクテハ	ナクテハ	ナイデハ
COLLOQUIAL 敬体							
JAPANESE (1863) 常体							
日用日本語対話 (1863)							
会話篇 (1873)	1	1	5	1	6	1	1

<表4：否定の条件表現形式に占める当為表現の割合>

作品	ザレ	ズバ	ネバ	ナイケレバ	ナケレバ	ナイデハ	ナクテハ	ナイト							
雑兵物語															
甲斐新話		1		1(1)				1							
古契三姫		2	1					1							
総 籙								1							
四十八手		1(1)	4(3)					1							
二筋道	1	2	1	5(2)											
品川楊枝			1	4(3)				1							
五大力		1		2(2)		3(3)									
吉原談語		1(1)	3(3)												
小 計	1	8(2)	2	8(6)	12(8)	3(3)		5							
浮世風呂		9(1)	12(6)	6(3)		7(2)		1							
浮世床	1	7(1)	7(5)	5(3)		9(1)		1							
潮来婦誌		3	6(4)	1											
小 計	1	19(2)	25(15)	12(6)		16(3)		2							
梅児誉美	4	1	6(3)	4(2)	5(1)	3(2)	1(1)	5							
辰巳園	4	2	6(3)	10(1)	2(2)	7(5)	1(1)	9(6)	2(2)	10					
春告鳥	4	1	7(2)	7(1)	18(8)	2(2)	2(1)	1(1)	4						
小 計	12	4	19(8)	23(3)	6(6)	30(14)	6(5)	12(8)	3(3)	19					
西洋道中	2	4(3)	4	4(2)	2	7(1)	4	3(3)							
安樂楽鍋	1		2	1(1)	1	2	3(2)		2						
胡瓜遣	2	2(1)	1		1										
春雨文庫	4	1	2(2)	13(1)	10(8)		7(6)	3(3)							
雪中梅	1	1	2	1	37(23)		1								
浮 雲	1	1	11(4)		15(7)	20(8)	1	9(8)	1						
小 計	9	3	1	10(6)	32(5)	53(34)	3	18(7)	38(17)	8(3)	14(11)	1			
舞 姫		1	1	4	1										
文づかひ				4	1										
変目伝	1	1	12			3(3)		2							
たけくらべ		3	11	3		3	1								
金色夜叉	26	4	9	1(1)		47(35)		3(3)							
半 日			5(4)	3(3)		1(1)	4(1)	1							
重右衛門の			1(1)		1	8(6)	1(1)	2		2					
琴のそら音						3(2)	2(1)			2(1)	1	3(3)			
坊ちゃん			3(3)			21(11)	16(4)			20(8)	10(4)	2	4(1)		
二百十日			1(1)				10(7)			1(1)	4(1)		2		
蒲 団			2(2)			9(8)	9(8)				5(3)				
野 分			26(23)	21(18)		7(5)	17(13)			1(1)	26(19)		9		
小 計	27	6	4	78(34)	30(22)		1	49(33)	112(73)	1	3	22(10)	54(31)	3	18(4)
或る朝															
清兵衛と飄															
道 草				1		114(101)	14(7)			2	14(8)	1	6(1)		
城の崎にて						3(2)									
小 計				1		117(103)	14(7)			2	14(8)	1	6		

* 「ザア」は「ズバ」に含む。
* 「ネヘキヤア」は「ナイケレバ」に含む。

関東地方における当為表現

〈表5：洋学資料 否定の条件表現形式に占める当為表現の割合〉

	ズバ	ネバ	ナイケレバ	ナケレバ	ナイデハ	ナクテハ
COLLOQUIAL 敬体		1				
JAPANESE 常体		1				
日用日本語対話集						
会話篇				4(2)	(2)	12(12)

(二百十日) 617)

現に君の前任者がやられたんだから、気を付けなさいといけないと云ふんです

『坊ちゃん』(291)

そして後期(明治四一年)にはネバが衰退し(条件表現に一例)、ナケレバ・ナクテハ・ナイトにまとめられる(用例はすべて『道草』)。

【道草】。

それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃迄には歸らなきゃならないんだから

(360)

單に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふ丈の意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強ひられても……

(493)

近頃は時候が悪いから、能く気を付けな

いと不可せんね

(429)

以上の例から、江戸語・東京語資料における当為表現前項部形式は、否定の助動詞又系のズバ・ネバとナイ系のナイケレバ・ナケレバ・ナイデハ・ナクテハ・ナイトが確認された。また史的变化としては、否定の助動詞又の衰退に伴い、当為表現においてもネバが漸減し、ナイ系のナケレバ・ナクテハにまとめ

られる過程がうかがえた。

このことは洋学資料においても同様の傾向を得た。洋学資料に見られる前項部形式はナケレバ・ナイデハ・ナクテハである(以下、洋学資料の用例はすべて『会話篇』による。数字は用例番号)。

Sô iu toki ni iwakeria naranu.

(EXERCISE VII・14)

Kono-ho domo wa hi no aru uchi tomari é

isukanai ja naranai.

(XVII・14)

Kutsu wo magitari kimono wo haratari shinakuteha

naranai ja nai ka.

(V・7)

今回調査した洋学資料は、外国人のための江戸語(東京語)の手引き書として書かれたもので、会話文と対話の用例が豊富である。また、その作成にあたっては江戸在住の武家・知識人階層が関わっており、幕末期の江戸語・東京語を反映した資料といえる。この洋学資料を調査した結果、ネバが当為表現に見当たらない。従来、武家・知識人階層には上方語的な要素を多用することが指摘されている。実際、滑稽本・人情本・明治文学作品に見られる上流話者の言語形式にはネバが確認される。なぜ、このような食い違いがおきたのであろうか。

これはネバが当為表現形式として衰退する様相のあらわれと考へたい。③。というのは、洋学資料は実際の会話文を再現する資料であり、文学作品に比べ口語性が高いと思われるからである。このことは、明治全期の文学作品にネバが見られたことから裏付け

られよう。小説の文章は、明治二〇年頃におこった言文一致運動を機に、話しことばに即した文章が用いられるようになり、地の文と会話文の接近が試みられた。こうした事情を考慮すると、今回調査した明治期文学作品は、話しことば的性格が強くなるもの、依然書きことばが用いられたため、洋学資料には認められなかったネバが見られたのだろう。ここでは口語性の違いによるものと推測を述べるにとどめ、課題としたい。

この他、表4にはナイケレバ↓ナケレバ、ナイデハ↓ナクテハへと変化する過程が示されており、特に両新形式の初出例は当為表現である点が注目される。

一・二 言語地図の構相

(1) 大橋地図

大橋地図MAP96「行かなくてはならない。」によると、関東地方の当為表現前項部は、「行かナケレバ」と「行かナクテハ(ワ)」の二形式が確認できる。

全体を見渡すと、ナケレバ類が関東地方の周辺部に片寄って分布しているのに対し、ナクテハ類はナケレバ類に囲まれた内側に分布しており、ドーナツ状の分布状態であるのが分かる。

この分布状況から、古形式ナケレバ類が分布していたところに新形式ナクテハ類が都心部におこり、古形式ナケレバ類が周辺に追いやられたという歴史が推測され、ナクテハ類の中に散見されるナケレバ類は部分的残存と考えられる。

また「方言資料叢刊」によると、ナケレバ類は「イガナケリヤ

1」(群馬県藤岡市)、「イガナキヤ」(茨城県岩間町)、「イカナキヤ」(神奈川県小田原・長野県松本市)が確認されたのに対し、ナクテハ類は「イカナクチャ」(東京都台東区)のみであり、ナクテハ類が都心に、ナケレバ類がその周辺を囲んでいることが、ここでも矛盾しない。

(2) GAJ

次に、GAJ206図「行かなければならない」の分布状況は、行かネバ・行かナケレバ・行かナクテハ(ワ)の三形式に大別される。

このうちネバ類は東北・中部・関西・中国・四国・九州地方と広汎に見られるのに対し、ナケレバ・ナクテハ類が関東・東海・東北の一部(福島・宮城・新潟)とネバに比べ狭い分布である(和歌山・岡山・高知・愛媛・熊本に孤存が認められるが歴史は不明)。

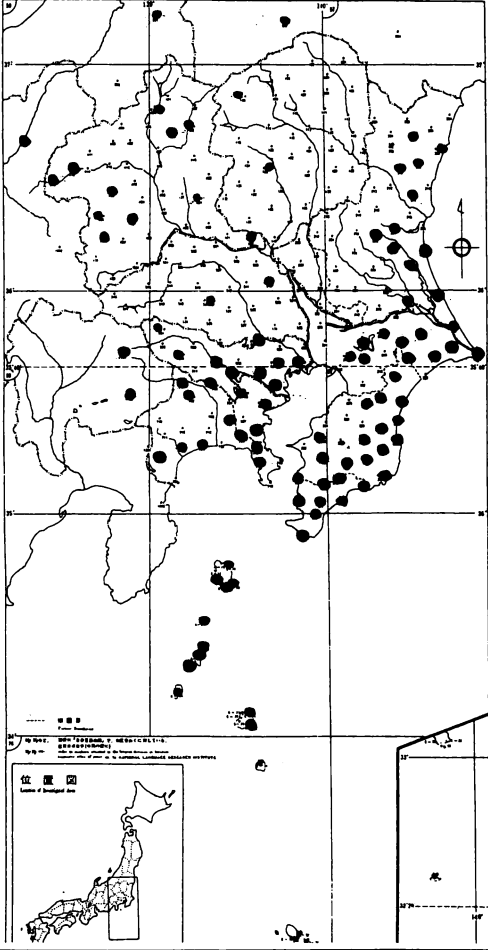
関東地方ではナイ系のナケレバ・ナクテハの二形式が確認され、ナケレバ類は茨城(太平洋側)・千葉・東京・神奈川・静岡・長野北中部、新潟南西部・福島・宮城(福島・宮城はナクテハ類が優勢)・新潟・三宅島に認められる。

一方、ナクテハ類は、岩手(宮城県境)・宮城・福島(太平洋側・中部)・茨城(埼玉県境)・埼玉・栃木・群馬・長野北部・新潟南部・伊豆大島に分布が確認される。

ところで、先の大橋地図および「方言資料叢刊」ではナケレバ類がナクテハ類を囲む分布図が示されたが、GAJでは都心部↓

関東地方 方言事象 分布地図
Dialect Distribution Map of Kanto Area of Japan

発行年 1982
発行所 言語学研究所
発行所 言語学研究所
発行所 言語学研究所
発行所 言語学研究所

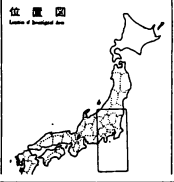


Map 96 「行かなくてはならない。」
(当義表現法)
(must go. (obligatory expression))

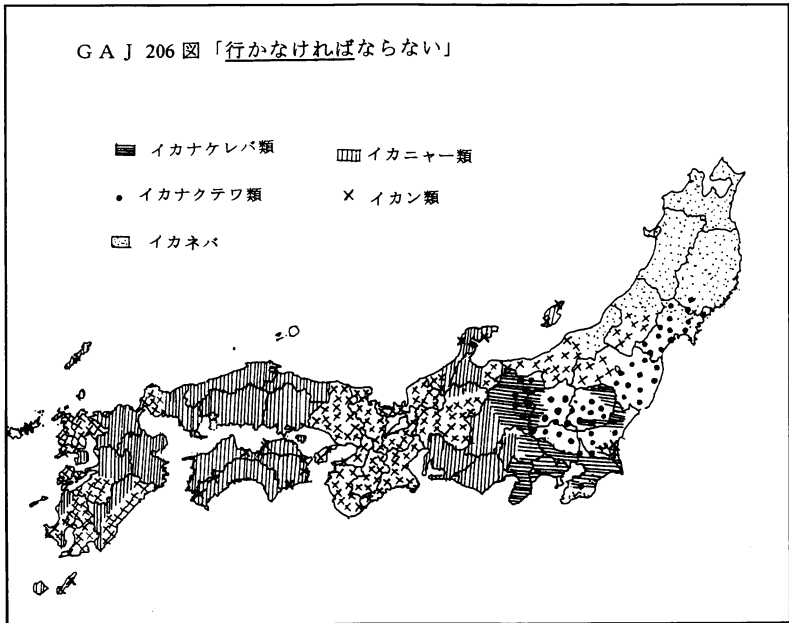
質問文 Q2
Question
「どうしても行かなくてはならない。」と家の借に話をする時の言い方は、どうなりますか。

- 「行かNAKEREBA」型
- 「行かNAKUTEWA」型

(注)
編者 田村 幸三, Map 91, 92



地図 1 大橋地図



地図 2

周辺部の様相はナケレバ／ナクテハ／ナケレバである。この点はどうのように解釈したらよいであろうか。

これは二案推測できる。一つは、都心部のナケレバがナクテハに駆逐されずに残存したとするナケレバ残存説。もう一つは、東京・神奈川・千葉（東京寄り）にナクテハ類が定着した後、再びナケレバが勢力を得たとするナケレバ蘇生説である。前説の補強資料として、明治三十九年に国語調査委員会によりまとめられた「口語法調査報告書」第三一条「動詞ヲ打消ニ形作ルニハ」があげられる。そこには関東地方に広くナケレバの使用が確認され、ナケレバが残存していたと考えられる。対するナケレバ蘇生説は、大橋地図の神奈川県の様相があてはまる。都心にもつとも近い東部の横浜市にナケレバ類が集中しているのに対し、西部の足軽郡や山間部にナクテハ類が分布しているのである。横浜市に古いナケレバが残存し、西部や山間部に新形ナクテハが使用されたとは考えにくく、共通語としてのナケレバが分布したと考えるのが適当ではないだろうか。ただしこの二図だけでは結論が出ないため、後考を期したい。

二 後項部の様相（ナラナイ・イケナイを中心とした）

二・一 江戸語・東京語資料の調査結果

江戸語・東京語資料の調査結果を表 6、洋学資料の結果を表 7 に示す。

調査の結果、江戸語資料ではナラス・ナラナイが占め、イカナ
イが洒落本・滑稽本に各一例、イケナイは人情本に二例認められ
るのみである。

どうもかへらにやならぬ 【傾城買四十八手】(405)

早く帰つてお節の支度をせにやアならぬ 【浮世風呂】(175)

他でもねへから往てやらねへけりやアならぬ 【春告】(541)

よつぽと骨をおらねエじやアいかねへ 【五大力】(172)

おれが端棒で付て見せねへぢやアいかねへはさ【床】(276)

肝心の梅里さんの気がそれた日にやア、いよく私の恥だから、
是非直にしくつてはいけないから 【春告鳥】(545)

ナル系優勢の様相は東京語資料・洋学資料も同傾向である。

蛇に会つた蛙どうやうですくんではかりおらにやアならんそ
のたびく 【安愚楽鍋】(160)

そこで君は僕と一所に熊本へ歸らなくちあ、ならないと云ふ
譯さ 【二百十日】(628)

此暮を越さなくつちやならないんだ 【道草】(552)

些と気を付けないじやア宜ないヨ・・・ 【春雨文庫】(316)

相連ないから用心しなくてはいかんと云ふのさ

【琴のそら音】(92)

確かりして呉れなくちや不可いよ 【道草】(413)

Tokoro de, shito wo herasanakucha naranai kara,

kinodoku da ga, temi ni mo ionna wo yaranakucha
naranai. (XV・13)

Ma shin wa moto de gozainasu ga, fudan ni sosho

wo orno ni mochimasukara, subete mina omanabi

nasaranai ja ikemasen! (XX・7)

右のような例から、言語資料に見られる当為表現後項部形式は、
ナラス・ナラナイ優勢の結果が得られた。明治中期からイカヌ・
イケナイの増加傾向がうかがえるが、依然、ナラス・ナラナイ優
勢の状態である。

二・二 言語地図の様相

(1) 大橋地図

大橋地図によると関東地方の後項部は、ナラナイ・オエナイ・
イケナイの三形式に大別できる。

千葉県上総以南にオエナイが分布し、この他、茨城・栃木県境、
茨城・埼玉県境、埼玉東部と埼玉中西部に認められる。また、イ
ケナイは神奈川沿岸部に集中し、その他、茨城・長野・神奈に孤
存している。それ以外はナラナイ類に広く覆われた分布となつて
いる。

ここで大きな特徴が見出せる。千葉県上総以南のオエナイと神
奈川沿岸部のイケナイは単独使用であるのに対し、その他のオエ
ナイ、イケナイ形式は、ナラナイと併用されている点である。こ
れはどういうことを示しているのか。

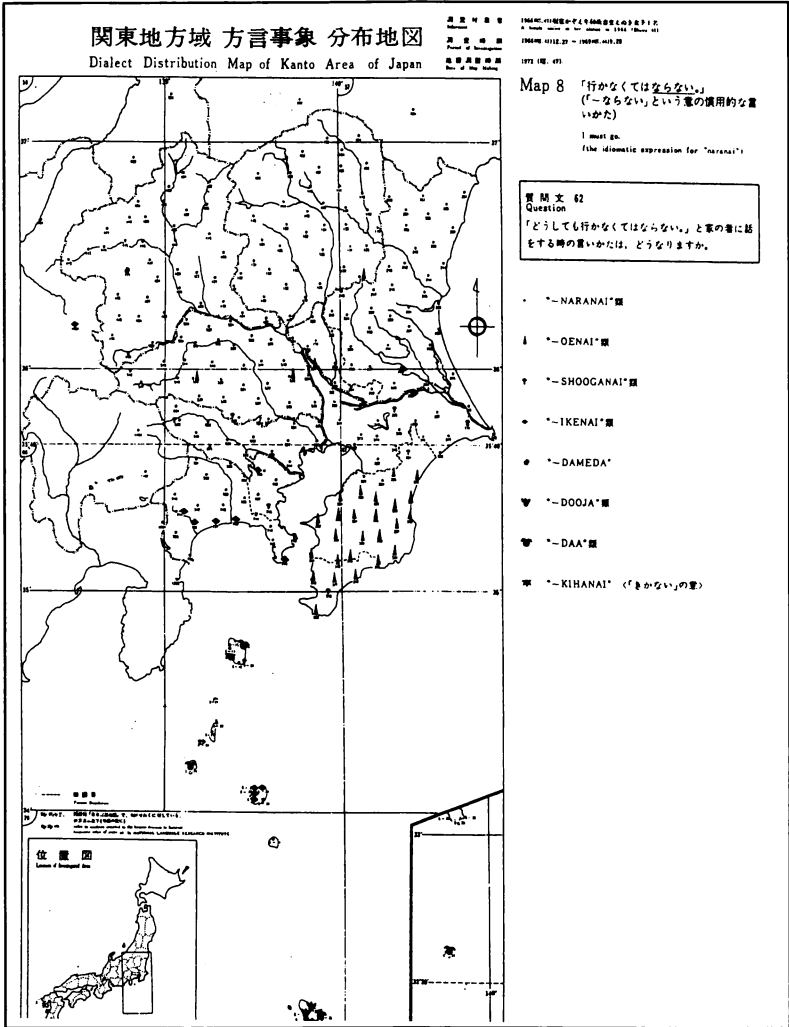
前節の史的变化ではイケナイは新形式であり、さらにオエナイ

<表6：禁止表現形式に占める当為表現の割合>

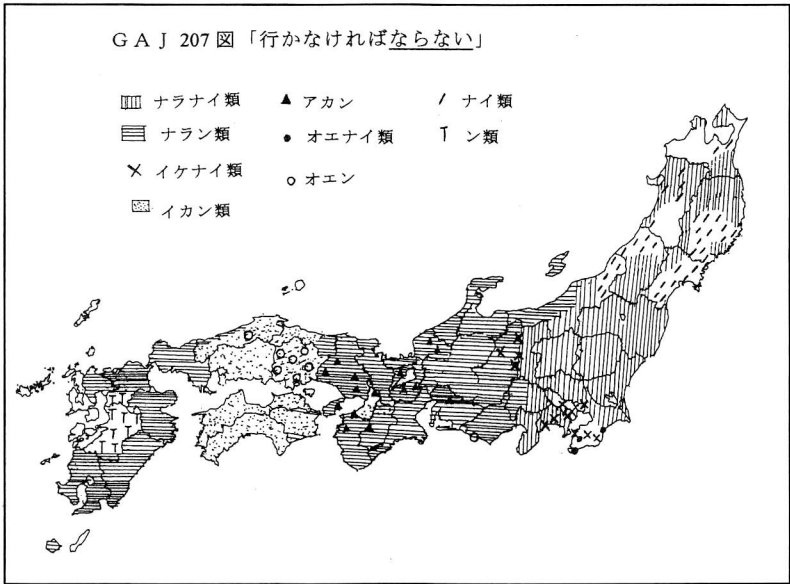
作 品	ナラス	ナラナイ	イカス	イカナイ	イケナイ	ダメ
雑兵物語		8				
甲斐新話		2(1)			1	
古契三娘						
総 籬		3	1			
四十八手	4(3)				1	
二筋道	1 2(1)	1(1)				
品川楊枝	3(3)					
五大力	1(1)	6(4)		1(1)		
吉原談語	1(1)	3(2)				
小 計	1 11(9)	15(8)	1	1(1)	2	
浮世風呂	12(7)	10(4)		5		
浮世床	8(4)	16(3)		7(1)	1	
潮来婦誌	3(2)	6(2)		2		
小 計	23(13)	32(9)		14(1)	1	
梅見馨美	2(1)	6(2)	7(3)	1		
辰巳園	1(1)	4(1)	24(14)		19	
春告鳥	3(1)	4(2)	20(10)	1	8(2)	
小 計	6(3)	14(5)	51(27)	2	27(2)	
西洋道中	2(1)	9(4)		7	22	
安愚楽鍋	5(4)	4(4)	6(1)	1	3	
胡瓜遣	1	3	1		1	
春雨文庫	6(1)	18(16)	1	1	1 7(1)	
雪中梅	28(15) 11(1)	1	1	4		
浮 雲	14(1) 11(8)	1 13(6)	1 7		6	
小 計	14(1) 53(29)	5(4) 50(27)	1 10	13	1 39(1)	
舞 姫						
文づかひ						
菱目伝		2(2)	2(1)		8	
たけくら	1 2	3	1(1)		1	
金色夜叉	31(26)	4(4)	22(2)	3	12(4)	
半 日	6(3)	2 1			3	
重右衛の	5	1(1) 2(1)	1(1) 1			
琴のそら	6(5) 2(1)		4(4)			
坊ちゃん	5(5) 5(5)	15(13)	1(1) 4		4(2) 3(3) 3<1>	
二百十日	3(3)	3(3)			14(4)	
蒲 団	12(10) 9(6)		1 5(2)		1(1)	
野 分	30(23) 9(9)	2(2) 8(8)		2	23(7)	2(2)
小 計	65(46) 61(50)	30(16) 23(18)	5(3) 39(9)	3	4(2) 65(19)	2(2)
或る朝						
清兵衛						
道 草		87(86) 18(17)			10(4)	
城の崎に	1(1)	1(1)				
小 計	1(1)	88(87) 18(17)			10(4)	

<表7：洋学資料 禁止表現に占める当為表現の割合>

	ナラス	ナラナイ	イカス	イカナイ	イケナイ
COLLOQUIAL 敬体	1				
JAPANESE 常体	3				
日用日本語対話集					1
会 話 篇	9(7)	(7)	1	3	5(1)



地図 3 大橋地図



地図 4

に関しては見た文献のかぎりでは用例が得られなかった。イケナイに関してはG A Jの様相を含め、次項で検討する。

なお、『方言資料叢刊』の調査結果は

ナラナイ：・群馬県藤岡市、栃木県宇都宮市、茨城県岩間町、

東京都台東区、長野県伊那郡、静岡県榛原郡・

浜名郡

イケナイ：・神奈川県小田原市、長野県松本市

となり、¹³⁾大橋地図と同様、神奈川県にイケナイが認められる。

(2) G A J

G A J 207 図「行かなければならない」にはナラナイ・イケナイ・アカン・オエナイ・スマナイ・ダメが認められる。ナラナイが全国に広く分布し、その他の形式が散在している様子が見てとれる。

このうち関東地方にはナラナイ・イケナイ・オエナイの三形式が認められる。オエナイは、大橋地図と同じく、千葉県上総以南に分布が示されている。またイケナイ類は、神奈川県・東京・千葉(上総以南)・茨城(孤存)・長野北中部に分布している。ナラナイは先述したとおり、全都県で確認できる。

ところで、先の大橋地図で問題となったオエナイとイケナイに関して、G A Jに興味深い分布が見える。千葉県上総以南のオエナイ地域に併用形式としてイケナイが認められる点である。全国の広汎な地域にナラナイが分布しているにも関わらず、なぜイケナイが併用されたのであろうか。また、神奈川のイケナイは大橋

地図とほぼ同じ地域に認められる。この二地域はどう関わるのであろうか。どこからイケナイ形式が伝播したのか、もしくは発想が似た形で独自に形成したのであろうか。

再度G A Jでイケナイの分布を確認すると、イク系（イカン・アカンを含む）は関西・中国・四国・九州に広く分布している。この分布状況から推察すると、先に西日本で成立したと考えられる。ただし関東のイケナイが西日本から伝播したのか、それとも似た発想のもと独自に形成されたのかは不明である。この点を歴史的な面から考えたい。

先述のとおり、江戸語話者の使用は享和二年に初出例が認められる。しかし話者の位相など、特筆すべき特徴は見られない（ナラナイ形も併用する）。ところが、田中（一九六七）は「浮世風呂」の「シタガ何事も氣長うせにやゆかぬはい。コレ見やんせ」（傍線は筆者による）の上方語話者の例をあげ、「これは上方者のことばであり、江戸語には、まず、なかつたと言つてよい」と述べている。さらに田中（一九六九）では「明治以降の東京語の当為表現を、近世江戸語のそれと比較した場合、もつとも目立つ違いは、江戸語には、まったく見られない「ナケレバイカン」「ナケレバイケナイ」「ナクテハイケナイ」など、後部分「イク系」の表現が現われてくる点である。」としている。しかし筆者の調査では、洒落本『五大力』滑稽本『浮世床』人情本『春告鳥』に江戸語話者のイク系使用を確認しており、江戸時代後期に既にイク系が江戸で使用されていたと考える。ただし、その使用はまだ

一般的でなかつたのであろう。

また、先の「上方者のことば」という指摘は、G A Jの分布状況をあわせ見ると、西日本から伝播したとも考えられる。しかし、近世後期の上方洒落本を調査した結果、イカン・アカン類の用例は得られなかつた。また、今回得られた用例から推測すると、江戸期の用例はイカナナイ・イケナイとナイが用いられていることから、関西から伝播したというよりは、むしろ、類似の発想のもと、独自に形成したと考えられる。なお、近世後期の上方話者によるイク系の用例が上方洒落本に確認できず、位相等を含めた関西地方のイク系の出自を確認する必要がある。さらに調査を進めたい。

そして先述の千葉・神奈川におけるイケナイに関しては次の二案が考えられる。一つは、ナラナイが分布していたところにイケナイが侵入し、分布をのびしている過程であるため、ナラナイではなく新形式イケナイを採用したとする考えで、もう一点は、東京湾・相模湾と太平洋沿岸部（伊豆諸島・神奈川・東京・千葉）にイケナイが集中していることから、海から伝播したとする予測である。が、この地図だけでは断定できない。

三 史的变化と分布の対照

以上、第一節に前項部、第二節に後項部の史的变化と方言地図の分布を概観してきた。本節では両者を対照させ、関東地方にお

ける当為表現を検討する。

まず、言語資料により明らかにになった点を以下にまとめる。

○前項部は否定の助動詞ヌの衰退に伴いネバが漸減し、ナイ系形式ナケレバ・ナクテハが中心となる。これは資料の口語性の違いからも裏付けられる。

○後項部はナラヌ・ナラナイが江戸・明治期にわたり使用される。イケナイの初出は享和二年の資料に確認されたが、江戸語期には洒落本・滑稽本に各一例、人情本に二例とたいへん少なく(ナラヌ・ナラナイは洒落本に一七例、滑稽本に二三例、人情本では三二例^②)、明治二〇年以降、増加の傾向が見られるもの、ナラナイの比ではない。

次に、方言地図の分布をまとめる。

○前項部はナケレバ類が都心部と周辺部に、ナクテハ類がその間の地域を占める、ドーナツ状態の分布であり、都心のナケレバは残存形と蘇生形の二説が考えられる。

○後項部はナラナイが関東地方全体に広く分布している中、オエナイが千葉県上総地方に、イケナイは神奈川沿岸部に確認される。イケナイは西日本に類似のイカンが認められ、関東に伝播されたものか、独自に成立したかは不明である。オエナイに関しては関東方言と考えられる。なお、オエナイ地域の併用形式はイケナイである。

右記の通時態と共時態を対照させた結果、次の二点が指摘でき
る。

関東地方における当為表現

①前項部は江戸から明治にかけてナケレバ・ナクテハが当為表現の二大形式となる歴史が示されたのに対し、分布においては言語資料と同様、ナケレバ/ナクテハの併用説とナケレバ(関東方言)の衰退↓ナクテハに交替↓ナケレバ(共通語)の蘇生という、重層的な変化が予測される。

②後項部では江戸・明治期にわたりナラヌ・ナラナイが中心的な形式であり、イケナイの増加はこれに及ばない。この点は方言地図の様相も通い合い、関東全土にナラナイが分布する。また、今回調査した言語資料にオエナイの例が得られなかったことを考慮すると、言語資料に記述される江戸語(東京語)の性格が問題となる。言語資料にオエナイが見られない理由は、当時の共通語(江戸・東京の中心で使用されたことば)で描かれたためと思われる。このことは、話者が上方者や田舎人であってもそれをその地の方言を反映していると鶴呑みにできないことを意味する。この点を埋めるのに方言地図を使用することはたいへん有効である。各地域の言語状況から中央語の歴史を再確認・補足・修正し、諸方言を含めた日本語の歴史が明らかにできよう。それと同時に言語資料に記述されることばの性格・特色も明らかにすると考える。

注

(1) 田中(一九六七・一九六九)は江戸語から東京語にかけての当為表現形式を整理し、前項部の変遷を中心に考察している。

それをうけ、渋谷（一九八八）は後項部を取り上げ、特に「イケナイ」の成立・変遷を他表現（禁止表現・危惧表現等）も含めて論じている。諸星（一九八五）は「帝国議会議事速記録」を調査し、田中氏の調査結果と比較している。

(2) 大橋勝男氏調査の「関東地方方言事象文法図」は、昭和四一年から四四年にかけて、明治三〇年代に生まれた六〇歳代の生え抜きの女性を対象に、伊豆諸島を含む関東地方の方言を二七六地点にわたって実地調査した分布図である。なお前項部形式の分布図は本稿掲載図以外に二図 (Map. 52・Map. 100) があるが、本稿はナケレバ類とナクテハ類の分布に注目したこと、二図が条件表現の接続法に重視した作図であったため、扱わなかった。詳しくは原図を参照されたい。

(3) G A J には本稿で扱った以外に208図に総合図がある。併せて参照されたい。

(4) 「方言資料叢刊」の調査は一九九四年に行われ、対象者はその土地生え抜きの六〇歳代の女性である。

(5) 明治期を前期・中期・後期に分類した理由は、当時起こった言文一致運動を背景とした状況にある。

(6) 明治期に入るとナイケレバは漸減する（前期に四例、中期に一例）。その用法も次例のとおり仮定条件であり、当為表現には見られない。

此方が勝手を知らねへからこんな頓間なことハしたがそれがいやで出やアがらねへけりやア場代ハ出さねへから五分

とんだア

ハテ人ハ大きなことをぞまねへけりやア開花の人物じや
ねへヨ
【西洋道中膝栗毛】（28頁）
【安懋楽鍋】（158頁）

(7) 松村（一九七〇）参照。

(8) 洋学資料でも他の条件表現にはネバが二例認められる。

(9) もちろんこうした事情以外に、文体の性質、作者の意識が大きく関わる。

(10) 大橋調査と比べると接続助詞バを落とす傾向が得られたが、ナケレバ/ナクテハの分布様相に変わりはない。

(11) 関東地方にもネバが千葉県南部に二地点認められるが、ナイ系優勢の分布状況が示されている。

(12) ただし「口語法調査報告書」は当為表現について言及したものでない点に注意を要する。ナケレバの他にはズバ・ネバ・ナクバが認められる。

(13) 「方言資料叢刊」は千葉県を調査地域に含んでいないため、オエナイ類の記載が見当たらない。

(14) スマナイは鹿児島県に散見される。なお言語資料でも用例を確認できる（『傾城買二筋道』『潮来婦誌』『雪中梅』『変目伝』『たけくらべ』『蒲団』『野分』に各一例（会話部分））。用例も僅かであり、鹿児島方言とどのように関わるのかは明言できないが、明治期に使用が増えること、ナケレバナラナイとはニユアンスが異なることから、スマナイは条件表現の帰結句として成句的表現（この他、困る・良い・悪い等）となり、それが

地図上にあらわれたと考える。ただし鹿児島県のみの分布であるため、方言形式とも考えられるが、不明である。用例を次にあげる。

そんならたべてくれねへけりやア気がすまねへ「傾城買二筋道」ですがね、聞たゞけの傳言は云はなくつちやア、私がお濱さんに濟まないから、まア嘘にして、……

「変目伝」(58)

それから先生に是非お目にかかつてお礼を申し上げなければ濟まないと申して居りましたけれど……「蒲団」(55)

(15) 地図では長野、茨城・栃木の県境、秋田・山形県境、山形・宮城県境に孤例、新潟に二例認められる。言語資料でもその使用が確認できる。ダメはスマナイと異なり禁止表現であるため、方言形式ではなく、当為表現の新形式と考える。

(16) 田中(一九六七)一一一〜一二二頁。また田中(一九六九)にも同内容の記載がある。

(17) 田中(一九六九)六六一頁参照。

(18) 渋谷(一九八八)の「イケナイ」の初出例は「浮世床」である。

(19) 以下の宝暦〜弘化期の上方洒落本(洒落本大成使用)を調査した。「穿当珍話」「聖遊郭」「浪花色八卦」「秘事真告」「陽台遺編」「遊客年々考」「肉道秘鍵」「月下余情」「正夢後悔玉」「感妬裏」「開学小笠」「原柳巷花語」「風流粹談議」「無論理問答」「風流裸人形」「今今八卦」「粋字瑠璃」「粋の源」「北華通

関東地方における当為表現

情」「粋庖丁」「菜芝一代記」「十界和尚話」「身体山吹色」「南遊記」「嘘之川」「当世廓中掃除」「粋の嘘」「色深狭睡夢」「北川規毅」「老棧志」「興斗月」「風俗三石土」。上記作品の当為表現後項部形式は「ナラヌ(ナラン)」「オカヌ」「キカヌ」であり、「イカヌ(イカン)」の記述は認められない。

(20) 会話文での用例数をさす。

調査資料

資料として用いたテキストは、以下のとおりである(作品成立順)。
「雑兵物語」(天和三年) 深井一郎「雑兵物語研究と総索引」武蔵野書院
「甲斐新話」(安永四年) 日本古典文学全集「古契三娼」(天明七年) 日本古典文学全集「通言総籙」(天明七年) 日本古典文学大系「傾城買四十八手」(寛政二年) 日本古典文学大系「傾城買二筋道」(寛政一〇年) 日本古典文学大系「品川楊枝」(寛政一〇年) 洒落本大成「狂言雑話五大力」(享和二年) 洒落本大成「滑稽吉原談話」(享和二年) 洒落本大成「浮世風呂」(文化六〜七年) 新日本古典文学大系「浮世床」(文化一一年) 日本古典文学全集「潮来婦誌」(文化一三年) 洒落本大成「春色梅児簪美」(天保三〜五年) 日本古典文学大系「春色辰巳園」(天保五〜七年) 日本古典文学大系「春告鳥」(天保七年) 日本古典文学全集「COLLOQUIAL JAPANESE」(1863) SHANGHAI: PRESBYTERIAN MISSION PRESS「日用日本語対話集」(DIALOGUES IN JAPANESE) (1863) 九州大学附属図書館蔵マイクروفイルム「会話篇」(1873) (KUWIWA HEN TWENTY-FIVE EXERCISE in the YEDO

COLLOQUIAL. FOR THE USE OF STUDENT. WITH NOTES.)

【Collected papers】London Ganeshia 【西洋道中膝栗毛】(明治二年) 明治文学全集【安愚楽編】(明治四年) 明治文学全集【胡瓜遣】(明治五年)

明治文学全集【春雨文庫】(明治九年) 明治文学全集【雪中梅】(明治一九年) 明治文学全集【浮雲】(明治二〇年) 日本近代文学大系【舞姫】(明治二三年) 教育社【作家用語索引】【文づかひ】(明治二四年) 教育社【作家用語索引】【変目伝】(明治二八年) 明治文学全集【たけくらべ】(明治二八年) 鶴岡昭夫【たけくらべ総索引】笠間書院【金色夜叉】(明治三〇年) 明治文学全集【半日】(明治三四年) 教育社【作家用語索引】【重石衛門の最後】(明治三五年) 明治文学全集【琴のそら音】(明治三八年) 漱石全集【坊ちゃん】(明治三九年) 漱石全集【二百十日】(明治三九年) 漱石全集【蒲団】(明治四〇年) 明治文学全集【野分】(明治四〇年) 漱石全集【或る朝】(明治四一年) 明治文学全集【清兵衛と瓢箪】(大正二年) 明治文学全集【道草】(大正四年) 漱石全集【城の崎にて】(大正九年) 明治文学全集

参考文献

大橋勝男(一九七六)【関東地方方言事象分布地図】第二巻 表現法

篇 桜楓社

大橋勝男(一九九〇)【関東地方域の方言についての方言地理学的研究】

第二巻 表現法事象分布論篇 桜楓社

奥村三雄(一九九〇)【方言国語史研究】 東京堂出版

小島俊夫(一九七二)【会話篇(E. Satow)にあらわれた江戸ことば】

【国語国文】41—5

迫野虔徳(一九九八)【文献方言史研究】 清文堂

渋谷勝己(一九八八)【江戸語・東京語の当為表成——後部要素イケン

イの成立を中心に——】大阪大学日本学報】7

田中章夫(一九六七)【江戸語・東京語における当為表現の変遷】【国語

と国文学】42—4

田中章夫(一九六九)【近代東京語の当為表現】佐伯梅友古稀記念 国

語学論集 表現社

寺川みち子(一九八四)【尾張方言の当為表現——ンナンとナカン

——】徳島文理大学文学論叢】1

諸星美智直(一九八五)【国語資料としての帝國議會議事速記録——当

為表現の場合——】國學院大学大学院紀要文学研究科】17

松村 明(一九七〇)【洋学資料と近代日本語の研究】 東京堂出版

【方言資料叢刊】第5巻【日本語方言の否定の表現】(一九九五) 方言

研究ゼミナール

【図説 静岡県方言辞典】(一九八七) 静岡県方言研究会 静岡大学方

言研究会編

【長野県史 方言編】全1巻(一九九二) 長野県編

付記 本稿は第四六回立命館大学日本文学会大会(二〇〇二年六月九日)における口頭発表表に一部手を加えたものである。また、地図掲載を快諾して頂いた大橋勝男氏に記して感謝申し上げます。

(ゆあさ・さお 本学大学院博士後期課程)